**在日台湾人作家温又柔『空港時光』研究**

22725

　　文藻外語大学　謝　惠貞（しゃ　けいてい）

**目次**

はじめに「移民文学」から「移動文学」へ

第１節　「空港」という「第三空間」

1.時空が交差する現場としての「空港」

2.置き換え可能の人生

第２節　多言語の使用による越境感から浮き彫りされた問題意識

1.語言の非対称性からなる階層性

2.降服と張り合うフィールド：テクストにおける異種言語共存

(Heteroglossia)

3.「言葉」の共鳴から生まれた責任感

第３節　多文化共生の戦略的使用

1.多文化共生の可能と限界

2.権力と歴史の「大きな物語(grand narrative)」に抗して

3.文学伝統の大きいな物語に抗して：自己表象と他者表象が連動する

メカニズム

終わりに　「他者性」から「間主観性（intersubjectivity）」

**要旨**

温又柔『空港時光』は、「主体」と「他者」の境界線を緩める空港を舞台とした「移動文学」であると言え、文学が国民文学の規範によってチェックされるメカニズムを弱め、作中の移民や作品自体の「他者性」を平準化している。その表現は、「國民」と「移民」間の相互理解を促進し、人物の人生を置き換え可能な人生だと演出し、「国民文学」の権威を弱め、他者を可視化させる「第三空間」を創出したと考えられる。

　また、温は外国語に開かれている「ルビ」の可能性を開発し、移動者の言語使用を形、音、義の組み合わせで、ヘテログロシア的なテクストを紡ぎ出した。自分の二重の言語的・文化的アイデンティティを特権だと述べる温は、恰も複数のパスポートのようで、それを自己表象と他者表象を交流させるメカニズムに活かされたと言える。それによって、マイナー文学の「言表行為の集団的鎖列」という特徴を持ち、さらに「相互主体性」を生み出そうとしている。

**はじめに「移民文学」から「移動文学」へ**

　近年、『海の彼方』や『無国籍：私の祖国はどこか』などのドキュメンタリー映画は、次々と台湾人が歴史に翻弄され、屈折に満ちた境遇に焦点を置いた。グローバル化の進展に伴うディアスポラは、それと彷彿させる新しい世代の台湾人日本語作家の生活に影響を及ぼした。2009年に「好去好来歌」(『すばる』， 2009.11。後に『來福の家』に収録。集英社、2011)により、すばる文学賞佳作を得て、2017年には『真ん中の子どもたち』(以下は『真ん中』と略す。集英社、2017)で芥川賞を受賞した温又柔は、3歳より両親とともに日本に移居し、幼少期は台湾語・日本語・中国語の三つの言葉が混ざりあう環境で育ち、さらに『空港時光』を通して、国籍、言語、民族のズレに位置する境遇に対して、論証的な視野を見せてくれる。

もしもデビュー作「好去好来歌」とその後の『真ん中』は移民文学色に溢れる産物だというならば、それが原因だろうか、後者は純文学の芥川賞の候補作に選ばれた当時、選考委員の宮本輝が、作中人物の言葉と民族の混雑に起因するアイデンティティをめぐる悩みを、「対岸の火事」や「他人事」だと批判した。言い換えれば、宮本輝はその作品を「国民文学」と対立する概念である「移民文学」として扱っていることが推察できる。

　そこで、本報告は、『空港時光』は、旅行を前提とする「移動文学」へ焦点を移行させ、日本人と日台と縁のある人物を並列することで、明らかに移民とその関連作品そのものが日本の国境や日本文学における「他者性」を曖昧にしている作者の戦略に注目したい。さらには、作中に、複数のルーツを持つ人物を登場させ、旅行文学、または移動文学における、必ずといっていいほど、生ずる異文化接触の場面を設定し、自然な文化の対照の提示を、いかに描いているのかを分析する。

**第１節　「空港」という「第三空間」**

1. **時空が交差する現場としての「空港」**

例えば、冒頭の「出発」と、最後の「到着」は、対照をなす好例である。

「出発」の主人公は日本人大祐である。彼は『三国志演義』が好きであることから、大学では中国語を履修し、そこで台湾人の両親を持つ彼女と出会った。彼女は、幼少期から日台間を行き来し、空港に対しては格別な思いを持ち、またアイデンティティ問題により、日本に住みながら孤立感を味わっている。一方、大祐は成人後、はじめてパスポートを申請し、はじめての海外旅行が台湾だった。アイデンティティをめぐって、迷いと無頓着を示す二人は、対比を成している。

　一方、「到着」は日本で育ち、中華民国のパスポートを持つ咲蓉は、羽田空港に戻って、入国審査の際、日本人でも外国人でもない通路を通った。それは中長期に日本滞在する外国籍の住民が使用する通路である。咲蓉は常に台湾で育った従姉妹の翠蓉の生活を想像し、二人が互いの生い立ちへ羨望を感じている。そして、祖母の家の使用人は東南アジアからの移民工で、「阿梅」という台湾名で呼ばれている。年をとった祖母は記憶が衰え、咲蓉に「阿梅」は外省人だから、台湾語ができないと告げた。こういった事例はいずれも移動者たちは、たやすく分類できないこと、また社会の主流的な認識とのズレを示唆している。咲蓉のエンパシイ（感情移入）により、咲蓉と阿梅の体験は交換可能だと示され、二人の間に連帯感もそれに伴って生まれたのである。

まさに、『ドイツの「移民文学」:他者を演じる文学テクスト』の作者、浜崎桂子が言ったように、「不安を伴うはずの体験は、テクスト化されることによって「文字化された文明社会の理解可能な地平」へとシヨックをやわらげられ、本来の場をはずされ (de-plaziert)、「再生成」(re-generis) されるのである。この「テクスト化された他者は、文字文化をもった文明社会の読者に向けて(中略)——発信され」[[1]](#footnote-1)，テクストを通して、対照組において個人の情念を呈示することにより、旅行という共通経験を通して、「国民」と「移民」の間の相互理解を促している。

**2.置き換え可能の人生**

もしも『真ん中の子どもたち』を、彼らが置かれた社会からの期待と受動的に与えられた「他者性」への反応と見なすならば、「移民文学」の問題意識を、「移動文学」のそれに置き換えることによって、すべての国籍や、民族、言語の使用者の「他者性」を平準化し、「国民」と「移民」の階層関係を打破し、これらの「他者性」を読者によって偶然の巡り合いとして読み取られれば、「他者」と「主体」の境界も変動しやすく、「移動文学」が他者性に双方向性を賦与することができる。したがって、読者が容易にその境遇を自身と置き換えて共感するので、中心主義の「国民文学」の権威を失わせるのだ。

　例えば、「日本人のようなもの」という収録作では、台湾生まれ、日本育ちの怡婷と、台湾で育ちながら日本を憧れる従姉妹の詩婷は、羨望しあい、相手の言葉と文化を学ぶ行為は、まるで鏡像を見ているかのようだ。日本育ちの怡婷は、「はじめから日本人みたい」[[2]](#footnote-2)な立ち振る舞いをし、一方、詩婷は「わたしも日本で育ちたかった。あの子は台湾人っていうよりも日本人のようなものだね、なんて言われる人生を歩んでみたかった。中国語ではなく、日本語で姐姐(おねえちゃん)にそう伝えたら喜んでもらえるだろうか？」[[3]](#footnote-3)と想像している。

また、「可能性」という作品は、台湾人男性教師Sと日本人女学生有貴との不倫を描いている。その台湾旅行は、二人の恋を日向で自由に呼吸できる特別な時間となる。また、有貴の誕生日は四年に一度の2月29日だという設定は、作中人物が共有する「特別性」を表示し、ひとりひとりに多少なりとも特別性を持ち合わせ、外国人だからこそ持つものではないメッセージを伝えている。有貴は、空港で連れ合って東京で落ち合おうとする中年の不倫男女に出会い、そこで有貴は、こう思った。「けれども、そうすることを、選ばない、とわたしは決めたのだ。それを選ばなかったことで得られる人生のほうが、自分にはずっとふさわしいはずだと期待して」[[4]](#footnote-4)いる。彼女はまるでもう一つの可能な選択肢が見えたように、ここである決意をした。

総じていえば、作中の「他者」と「主体」の境界線を変動しやすくするメカニズムは、まさにこの「空港」という特殊な場所の雰囲気によるものである。それが、ホミ・K・バーバ(Homi K. Bhabha)がいう「第三空間」を醸し出し、変動と交渉のできる空間に変身するのである。

その「類似性」の権利を平等でありながら差異を許容する要求と見なすには、二重のアイデンティティの認定が含まれている。……いうまでもなくこの二重性は想像の範疇でいる「ペアになる」こと。私がここで構築したい二重性とは、その主体は自らを「まるで他者が見る通り」に見る。一種の団体による交互作用のプロセスである。それは、「不確定性」の不安させる時が、「二元」による肯定的な確認を破れ、自給自足の「ペアになる」ことの反復を越え、対話をする「第三空間」に赴くのである。[[5]](#footnote-5)

まさに、空港という主権の辺境という地理的位置が、あらゆる利用客がホームアドバンテージを持たず、すべてパッセンジャーになりうるのだ。旅行者として互いに対して、容易に「自らを『まるで他者が見る通り』に見る」ことができるから、日本語文学に持ち合わせている宿命的に「国民文学」の規範による検査システムを弱化し、「他者」を可視（visibility）し、「第三空間」に変えるのである。舞台を空港という中間地帯に置くことによって、作家本人が移民であっても、『真ん中の子どもたち』のような、「移民」を直接に描く文学とはならず、暫く焦点を階級性を成す中心と周縁から解き放せ、ポイントを「移動」に注目する文学に置くことができた。

**第２節　多言語の使用による越境感から浮き彫りになる問題意識**

**1. 語言の非対称性からなる階層性**

たとえどんな場所にいても、「他者」と「主体」の境界線が硬直化すれば、往々にして「マイノリティ」と「マジョリティ」の二つのグループを生み出すのである。多くの旅行文学に読める例では、語学力の不十分さにより、旅行中、言語の非対称性に出逢い、誤解を招くドタバタ劇を展開するシーンがよくある。他方、これとはまた異なる語学の力の非対称性が成した、一味違う「階層性」は、また『空港時光』にも言及されている。

　「あの子は特別」という短編では、台湾在住の駐在員の子ども、ススムが、周囲の日本家庭が台湾社会と距離をおいて自らの集団の中で生活することと異なり、積極的に中国語を学び、台湾人の子どもの社交生活に溶け込もうとしている。温又柔のデビュー作「好去好來歌」では、「あの子は特別」という一文は、台湾生まれ、日本育ちの主人公楊緣珠が、日本人同級生にイジメられた際に浴びた罵声である。本作において、この一文が一風変わって、肯定的なニュアンスを帯び、集団主義を重んじる民族性を持つ日本人が、個人として友好的な選択をする可能性を展望し、言語の壁による階級性を打ち破る。

日本人にしては、ススムの中国語は特別に流ちょうだった。それもあるからか、ススムはすすんで台湾人である怡君たちと遊びたかった。あの子は特別だよね、とみんなで言い合った。大抵の日本人の子どもは、児童遊園に来てもいつも自分たちだけでかたまっていた。まるで、わたしたちのことなんか目にも入っていない調子で。[[6]](#footnote-6)

　温又柔が日本エッセイストクラブ賞を受賞したエッセイ集『台湾生まれ　日本語育ち』（白水社，2016）においても、「言語による非対称性からなる階層性」について論じたことがある。

温又柔は、「自分にとって日本語で書くということは、両親の「国語」とは異なる言語で書くことであり、祖父母にとってはかつての「国語」であった言語で書くことになってしまう」[[7]](#footnote-7)ことや、日本統治時期の日本語作家呂赫若が「帝国が強いる「国語」と、「植民地」の「母語」」[[8]](#footnote-8)の狭間にいる創作状況を意識している。グローバル化に置かれた日本社会において、温又柔は日本の主流社会に対して、「国語とは何か」という質問を提起し、同時にたえず台湾の歴史事件を再考している。戦前の台湾にせよ、現代の日本にせよ、国が認証した言葉がその他者と遭遇する場合、いつも後者が前者に順応しなければならない。そこで、多重の階層構造を形成している。

前述したように、芥川賞の審査委員の宮本輝が、『真ん中の子どもたち』 の内容は、「対岸の火事」だと評した。筆者は宮本氏の立場が如実に言語による階層性構造を再現したと考えざるを得ない。もしも、根本的にこうした構造を解体したければ、温又柔が作中に引用した、アメリカの良心と呼ばれるスーザン•ソンタグが唱えるように、「少なくとも一日に一回は、もし自分が、旅券を、冷蔵庫と電話のある住居をでこの地球上に生き、飛行機に乗ったことの、膨大で圧倒的な数の人々の一員だったら、と想像してみてください。」[[9]](#footnote-9)と自らがある言語の上層階級の使用者だと意識することから始めなくてはならない。

しかしながら、その一方、常に国籍問題に悩むマイノリティとして、温又柔は、こうしたプレーシャーから解放される時間は限られている。「揺れながら眠ることの醍醐味。スーザン•ソンタグの箴言を忘れ呆けて私は幸せだった。中国語とも台湾語ともつかない囁きが聞こえてくるような気がする。」[[10]](#footnote-10)。

　たとえ、温又柔はこうした悩み多きマイノリティであっても、「対岸の火事」という評への怒りを表明してから、彼女はヘイトスピーチの連鎖さに加担せずに、多文化共生の理想と現実を踏まえ、それと対立の立場から創作するのではなく、周縁に立脚して、再出発し、互いを他者と見なす認識の境界を取り消そうとし、自らその手本を見せた。

　『空港時光』が「移動文学」の形を取るため、マイノリティとマジョリティの権力関係のアンバランスも、背景に引き退けた。Carolin Emckeが言ったように、「幸せなライフスタイルと愛し方を述べる物語は、排斥と憎しみに抗する戦略である。こうした物語が、他の不幸と軽蔑に満ちる物語は異なる次元に属し、あらゆる人間に幸せをもたらし、またすべての人間に希望を抱く権力があると掲示している。」

**2.降服と張り合うフィールド：テクストにおける異種言語共存(Heteroglossia)**

『空港時光』は上記の芥川賞事件の報道から見て分かるように、、温が訴えている読者の一部は、民族や言語に関してアイデンティティ危機を感じたことがない日本人の読者である。温又柔が日本語の環境が常に外来語に開かれているのだという空間の可能性を切り拓いてもいる。

具体的に温又柔が使用した戦略とは、「振り仮名（ルビ）」である。温がかつてコラムで「失敗也不壞（失敗しても悪くない）」（『聯合文學』410期）と題した文章で、彼女が愛する中国語と台湾語の言葉の多くは、「記憶中令人懷念的字句（記憶に懐かしく思う言葉）」だと述べている。そこで、筆者はテクストにおける言葉の表現をリストアップしてみた。表一をご参照ください。表一において、温が日本語の文脈に集め、引用したいくつかの混用表記は、11種類に分けられる。

（1）は完全に中国語の文脈（context）だが、日本語で表現する、(2)は、中国語と日本語の文脈が交差している、(3)は、ピンインの学習成果を見せており、中国人やピンインを学習している日本人など言語の越境経験者も、テクストの読み手として設定していることを示唆している。この部分は、東山彰良の『流』には見られない。(詳しくは、筆者の「互相註解、補完的異語世界――論東山彰良『流』中的文化翻譯」[[11]](#footnote-11)を参照)この部分は、温又柔が第二言語として中国のピンインを学習する経歴が、東山と異なることが分る。

(4)は、日本語の表記で、台湾語の音声を表すが、漢字が中国語の理解者の架け橋となる。（5）はカタカナのみで台湾語の音声を表記する。例えば、ン•シ•タイワンラン、アイ•ゴン•タイワンウェ。日本語も台湾語も理解する者のみ、その意味は、「あなたは台湾人だから、台湾語を喋りなさい」と分かる。日本語しか分からない読者にとって、この文は文脈によっていくらかは推知できるはずだ。

（6）は日本語によって意訳している。読者に中国語の意味を理解してもらう上で、読みの流暢さが保たれている。

（7）台湾語に日本語の解釈を記す。例えば、、等。台湾では家族の呼び方の複雑さと親族の関係をより重視する文化の違いを表す。日本語のおばの同義語は、台湾語では異なる人物を指している。

（8）は、台湾語の音声を日本語によって解釈する。この部分は、外省人出身の東山彰良が『流』では使っていない表現 (上述論文の分析を参照)でありながら、温又柔のテクストでは特に目立つ表現となる。例えば、、、！、等。温又柔の特徴の一つとして、東山彰良と異なり、台湾語を母語の一つとする表現にあることを物語っている。両者の異種言語共存(Heteroglossia)の表現は、註解、補足などの自己翻訳によって文化翻訳を行うのだが、換喩的に、その背景にある中日台の言語及び文化のコンテクストには、やはり個人差があり、それぞれの傾向と形式が違う。

（9）は中国語の漢字に中国語の発音と注釈を付ける。例えば、清粥=お粥、油條=塩味をつけた小麦粉で作った揚げパン、鹹菜=台湾風漬物など、多くは台湾特有の食べ物を形、音、義の三者で併記している。

（10）は西洋の概念を中日二言語の訳を併記する。例えば、、白色、、、など。これは英語が、中国語と日本語の使用者の共通語で、旅行者の共通語の特徵を持っている。

（11）は、英語によって日本語の解釈、或いは日本語の外來語を表記する。例えば、 、など、直接英語で表し、日本語が英語のコンテクストを吸収している現実を表す。

日本の読者にとって、上記の多くはその表記でだいたい意味を推知できるが、(3)(4)(5)の表記なら、その意味を推知しがたいため、作品中の異化作用を成している。

まとめていえば、温又柔は、日本語のコンテクストに内在している、外來の言語に開かれる空間「標示假名（ルビ）」、つまり前述したホミ・K・バーバが言う「第三空間」を生かし、日本語のコンテクストで他の言語の原語と原音に還元し、また新語を受け入れる寛容性や、更なる多くの移動者が使用している形、音、義を見せた。表一から分かるのは、温又柔が台湾の親族関係や、台湾語音声をより多く「收集」したということだ。彼女が自ら価値のある言葉を選び、日本語のコンテクストで受け継ぐのである。これらの「語彙」は「引用」の形で「再生」され、また記憶されていく。たとえ、温が言葉の意味を誤解した場合、例えば「婊子」は私生子を罵る言葉ではなく、性生活が乱れている女性を指すので、「息子」という作品の冠宇に使用するのは的確ではないが、理解できないではない表現となる。ましてや表一の一部は、片言のため、日本語の文脈からは完全に理解できかねる。

土屋勝彦は、かつて『越境する文学』(水声社、2009)で、「国民文学」と「移民文学」を区別し、「ある境界線を越えた文学」=「越境文学」だと定義している。それに基づけば、更に作品自体にある異種言語共存（Heteroglossia）の多極構造を理解することができ、それによって、文学伝統におけるナショナルリズムの價值観への同調を修正し、それが文学性を凌ぐ問題を解決するのである。温又柔は、こうして土屋勝彥が示した理想を実践していると言えよう。

また、西成彦は、かつて『バイリンガルな夢と憂鬱』（人文書院、2014）で、「足し算されたバイリンガリズム」[[12]](#footnote-12)と「割り算されたバイリンガリズム」[[13]](#footnote-13)の言い方で、相異なるバイリンガル状態が齎し得る可能性を解釈する試みをしている。前者は、母(国)語ともう一つ熟知している別の言語を同時にこなす狀態。後者は、母語自体が分裂している状態を指す。この理論の枠組みによって、二元對立の考え方を打破することができる。

西成彥は、『外地巡礼』において、この理論で温又柔のエッセイ集『台湾生まれ日本語育ち』を論じ、温が、「「語言」的割り算に対抗し」[[14]](#footnote-14)、また「たったひとつの母語=母国語」を基点にして「足し算」のように「外国語」を学ぶしかないモリンガル話者に対して、「母語」と「母国語」のあいだに罅が入った状態に置かれた多言語使用は、「割り算」……の結果に生じた言語と言語のあいだの「溝」に苦しめられるのである」[[15]](#footnote-15)と分析している。もしこの分析をもって、さらに温の『空港時光』を考えれば、温はたしかに「好去好來歌」で言葉の「溝」に苦しめられる狀態を描いている。しかし、温は『真ん中の子どもたち』をターニングポイントにし、『空港時光』になると、完全に戦略的にこの「溝」を独自に解釈し、そしてそれを苦にしなくなった。以下はテクストを引用して論じる。

**3.「言葉」の共鳴から生まれた責任感**

言語の非対称性の関係から重層に解釈できる空間が生まれ、また誤解を生かす空間も出来、さらに単一言語の使用者が具体的に理解できない多言語の使用、感情の交流活動は、言葉による制限を超えて、同じく相互理解の効果をもたらす。

例えば、「親孝行」では、白色テロで惨死したの遺孤の文誠は、語り手の文建と兄弟と同様。日本で成功した文誠は、育て親に当たる文建の両親と文建を日本の観光に招待する。待合室での、各種の言語サービスは、文建の両親に日本時代を思い出させた。それぞれ台湾語と日本語の異なる言語で、会話するシーンも描いた。

父は一歩も日本に足を踏み入れたことがない。それなのに父は、ことあるごとに富士山の神々しさを語り、天皇陛下がお住まいの皇居を死ぬまでに一度は拝みたいと繰り返してきたのだ。……「まさか生きてる間に、あたしまでナイチに行ける日が巡ってくるとはねえ」 ナイチ、という響きを文健はずっと台湾語だと思っていた。日本不是內地。文健は言わずにいられない。日本是外國。だからこれ（筆者注：パスポート）が要るんじゃないか。[[16]](#footnote-16)

そこには、ギャップとしての「第三空間」が生まれたが、温又柔が小説で引用した『暗黙知の次元』にあるように、「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」[[17]](#footnote-17)。「百点満点」という短編では、「意味さえつうじあっているのなら、親と子で、別々の言語を口にするというのは特におかしな状況ではない。」[[18]](#footnote-18)という描写によって、日本に移住する親と子が、異なる言葉を操っても、気持ちは通じ合えることを描く。この例証は、また本作が言語問題に注目しながらも、そのポイントを言葉を超越する価値に置いていることだ。つまり、言葉は民族の境界線に成りえても、理解の境界線になるとは限らない。

スーザン・ソンタグ（Susan Sontag）は、「文字の良心」で、以下のように指摘している。「作家の役命は、世界の本来の様子を見せるところにある。たとえ、各種異なる要求や、地域と経験に満ちたとしても」[[19]](#footnote-19)，また「作家がやるべきことは、我々を呼び起こし、束縛を追い払うことを助けてくれるべきである。同情と新たな興味のルートを開き、……我々に、変えてもいいと注意してくれる」[[20]](#footnote-20)。温又柔は、この意味において、一枚岩の民族と言語のアイデンティティの境界性について、異論になる例を示した。

『聯合文學』400号のコラム「老紳士的日語（老紳士の日本語）**」**で、温は「台湾を訪れる日本人観光客の増加が、日本人の姿と言葉によって、これらの日本語の分かる台湾人たちに、何とも言えない郷愁を感じさせたのだろう。それだからこそ、彼らに話しかけたくなる。……そう思うと、私の胸は微かに痛む。そして、私の中に、日本人である部分と台湾人である部分が、ともに自分自身にこう告げて、期待している。もっと彼ら祖父と同じ世代の方々の声に耳を傾け、もっと彼らが体験したその歴史を理解しなければならないと。 (頁53)」と告白している。

これは、台湾の読者には、距離をおいて台湾内部のコンプレックスを見てしまったという衝撃を与えるものだ。恰も、ホミ．バーバがいった「類似性」に繋がる。ホミ．バーバが「探討梅密及後殖民之協力問題（メーミとポストコロニアリズムの協力問題を論じる）」という一文では、こうした類似性における「瞬時の現像」の実例は、倫理觀をめぐる会話に繋がる。バーバがメーミの表現を論じる際、以下のように言っている：

　　倫理上の衝撃は他者の「差異」から来たもので、それとは逆に突然から来たのである。

突然の「類似性」或いはある物かある人の類似性により、「そうのように見える」けど、

実質に「似ている」のではないことが、日常生活に一つの空間を占めている。──民族

主義者は依然として彼らの信仰を持ちながら──日常の営みに突然とコントロール不

能の行為の立場、或いはせめて倫理的な約束などの條件が……一種の実存的な衝擊が倫

理的な「対話」を開始させるのだ。[[21]](#footnote-21)

温又柔は『空港時光』の人物の境遇から、また「「中間的孩子們」的特權（「真ん中の子どもたち」の特権）」（『聯合文學』406号)から、己れと對照を成している日本人とも台湾人とも類似性を持ちながら、そのどちらにも受け入れられないことを見出している。そこで、自身との倫理的な対話を展開し、「日本人専用の日本語、台湾人独占の中国語、両者とも私を外に排除し、着地点が見つからないようにし、私を宙吊りにし、呼吸困難させるのである。過去に、こうするように考えた自分のために、私は「真ん中」で書く。……「両者とも是なり」與「両者とも非なり」の間で揺れる私は、最大限に私に付与された「特権」を生かす（頁63）」。

筆者はかつて「「国語」への質問状――在日台湾人作家温又柔「真ん中の子どもたち」を中心に」(『台湾日本語文学報』42号、2017.12)で、「原文「二項対立的な同一性の捉え方を撤廃し、「完璧な」言語内部の階層構造への編入を拒絶し、支配的言語の権威による貶斥を拒否することにもなる。つまり、支配的言語とその話者の強固化に加担しないことが重要なのである」[[22]](#footnote-22)と指摘し、登場人物のアイデンティティの揺れと限界を論じた。

では、温の特権に戻って考えると、それは具体的に何を意味するのか?彼女は、かつて上記の「「真ん中の子どもたち」の特権」（同上）で、「「私は台湾人であり、日本人でもある」と、「私は台湾人でもなく、日本人でもない」。私は、日本と台湾の間で行き来する意識も、また「両者とも是なり」と「両者とも非なり」の間で揺れ動いている(頁62 )」。

それでは、日本語のマジョリティに属する多和田葉子の言葉と合わせて考えてみたい。多和田が「8　ソウル　Seoul　押し付けられたエクソフォニー」で述べたように、日本は「母語の外に出ることを強いた責任がはっきりされないうちは」」[[23]](#footnote-23)、日本のコロニアリズムによって日本語の学習を強いられている地域の人々に向かって、「エクソフォニーの喜びを説くことも不可能であるに違いない」[[24]](#footnote-24)と多和田は考えている。但し、マイノリティとして温又柔は、小さな物語の視点から、多和田の考えを喜びに変える特権を持っている。自らの二重的な言語的アイデンティティを持っているからこそ、特権を感じられる。そしてこの特権は、また責任を伴う。周縁文学とマイノリティ文学の能動性が、現実への介入に繋がり、さらに担い手となり、郭南燕が『バイリンガルな日本語文学――多言語多文化のあいだ』(東京：三元社，2013）を編集する立場に同調し、共に日本語作家が文学における市民権の取得に尽力するようになる。

まさに、温又柔の文学出発期の啓蒙書 (「我的課題（私の課題）」、『聯合文學』407号)である、川村湊の『戦後文学を問う―その体験と理念 (岩波新書)』所言：「日本人だけ注目しなくなる時、近隣のアジア各地の「亡霊」の行き場を更に目を配るだけ、日本の『戦後』が真に終わり、日本の『戦後文学』が真にその終焉を迎え、日本の「新文学」が真に始まるのである」[[25]](#footnote-25)。

**第３節　多文化共生の戦略的使用**

**1. 多文化共生の可能と限界**

それだからこそ、作者が作中人物の「他者性」を目立たせるか、隠すかを取捨選択する行為は、その実践責任の戦略に関わるのだ。第一節でも言ったように、「移動文学」の形式で書いた『空港時光』には、もう一つ利点があり、それはつまり作者の「当事者性」との距離を保てることにある。野崎歓がかつて温の「来福の家」という小說がエッセイのように読める[[26]](#footnote-26)、つまり、作者本人と重なって読まれやすいと述べている。しかし、もしその移住地をアメリカに置き換えたら、まったく同じように成立する境遇は、パラレルワールド的な生存境地の対照組を成している。

例えば、『空港時光』における「異境の台湾人」という短編では、アメリカの留学先で恋仲となった日本人俊一郎とアメリカ育ちの台湾人女性Jessicaが、連れ合ってJessicaの従兄の結婚式に参加する時のカルチャーショックを描いている。中国語が得意でないJessica，台湾帰省後は、両親の中国語と英語の通訳に頼りぱっなしである。上の世代の無条件な愛情が下の世代のJessicaたちの、台湾との心の距離を縮めた。このJessicaは、最も温又柔本人の「当事者性」に近い「到着」の咲蓉と彷彿させており、両者の設定は一見遠く見えるが、非常に近いのである。

このような距離は、読者に、テクストを作者の自伝的な小説として読まれずに、本質主義化されている移民のステレオタイプから離れ、虚構と置き換えの創造空間を得ることができた。作中人物全員の境遇が読者にとって置き換え可能な人生の選択肢に成り得、それにより、各種の「可能性」を比較することができよう。ホミ・バーバがいった「そうのように見える」けど、実質に「似ている」のではないという倫理的な対話空間が開かれ、この共鳴の重なる地域を拡大し、作中では感情の表現にせよ、言葉の使用にせよ、いずれも他者に近づき、他者との相互理解の可能性に働きかけるのである。

まるで、温又柔が言ったように、日本において、彼女の文学を歓迎する人も拒否する人も、基本的に彼女を「外国人」と見なし、**「**私の作品の本質を捉えていない (『聯合文學』401号)」。温又柔は、かつて小說『真ん中の子どもたち』の主人公天原琴子を描き、彼女が日本人の父親と台湾人母親の下に生まれ、その生活には「非純正者=真ん中の子どもたち」の直面している「包摂と排除」が満ちている。小説は、さらに「国語」とは何か?何か台湾人／日本人／中国人? 純と不純の二元對立的なイデオロギーの暴力、及び排他性的な言論に対して、疑問を提起している。ただ、『真ん中の子どもたち』の人物設定は、やはり移民に設定したせいか、上の宗旨は、誤読されやすく、単なる「外国人」の文学に分類されがちである。

しかし、まさに新鋭の社会学者の塩原良和が『共に生きる：多民族・多文化社会における対話』で述べたように、移民者の境遇はもともと「混雑(hybridity)」であって、完全なる「異」文化ではない[[27]](#footnote-27)。ところが、文学の分野では、温の文学を「外国人」文学と見なすものは、彼女が日本文化と言語を内化している部分を忘却し、その文学を完全なる「異」国人文学で扱う嫌いがある。

そこで、我々が進んで言えるのは、もしも「外国人文学」か「移民」文学の枠組みで、『空港時光』を「異文化」の文学として理解するならば、文化的本質主義になりかねない。なぜなら、それは上野千鶴子が提示した、かつて日本社会の多文化主義の発展の問題点にも繋がっている。

原文「多文化主義にはふたつのバージョンがあります。ひとつは“差異を承認せよ”という「承認の政治」です。そうなると、お前の差異と真正性（本ものらしさ）を証明せよという要請に迫られます。これが本質主義や特殊主義につながります。もう一方で“差異はないから同じように扱え”という平等の要求です。そうなると個人化や普遍主義が進む一方で、特殊な差異は認めない、ということになります」。[[28]](#footnote-28)

筆者が思うには、温の前の２つの作品は移民を主人公とする色が濃く、そこで、「外国人」文学と見なされたのは、文壇がその文学を移民文学と位置づける「本質主義」による結果である。但し、それは、移民作家本人が同時に上野がいったこの二つの活動を行うことの障害にはならない、戦略的に「承認の政治」の「平等の要求」を併用することが可能である。温の創作プロセスにおいて、「好去好来歌」の趣旨は、後者の「平等の要求」の要素が強く、そして『真ん中の子どもたち』は、「平等の要求」と「差異を承認せよ」の間から、温独自の真ん中の概念を生み出した。

『真ん中の子どもたち』が伝えたい趣旨とは、「私が表現したい「真ん中」とはとても幸運な境遇で、自分と深く係わる国とそれぞれ適宜な距離を保ち、同時にそれぞれと緊密な関連を持つ「可能性」 (「三月的記憶（三月の記憶）」、『聯合文学』406号)を追求していると考えられる。そこで、筆者は、真にその文学の本質を文学の技法によって伝えることに成功したのは『空港時光』だと思う。そして、その本質は、彼女の個人的な混雑性にではなく、世界的な視野で、もっと広い世界の現実の枠組みにおいて、類似する境遇を描くことである。

それは、作者温又柔が『真ん中の子どもたち』の序で展望したように、「我々はこれらの母国と母国の中間地点に立ち、ここを起点とし、どこまでも行ける」ということだ。言葉の共鳴により、作中人物の間、特に言語、民族と国籍が混雑する者は、連帯感が生まれるはずであり、これが感情面においても狭間の真ん中 (in-between)にいるアジアの孤児のようなコンプレックスを振り切り、世界の真ん中(the Center)を展望するに踏み切ることができよう。

更に、小泉康一、川村千鶴子編著の『多文化「共創」社会入門 ――移民・難民とともに暮らし、互いに学ぶ社会へ』で、更に積極的に「共生」を「共創」に切り替える思想を唱え、「対話の能動性」と「複眼的な思考力」を提言している[[29]](#footnote-29)。まさに『空港時光』において「複眼的」に各種の人物設定をし、いわゆる「純正」の日本人や台湾人を、この議題について異なる考え方に誘導・啓発するのである。

温又柔は、『聯合文學』のために書いたコラム「深愛語言的拐杖（言葉を深く愛する杖）」 (『聯合文學』403期、67頁)で、ベトナム生まれのアメリカ監督、トリン・T・ミンハ（Trinh T. Minh-ha）の表現を以下のように借用している。「言葉は力を見せる領域であり、同時に無意識に降伏する場所でもある。非常に複雑な従属形態となる」。これを第二節と一緒に考えれば、言語間の「異種言語共存(Heteroglossia)」から、多文化共生までは、またマイノリティとマジョリティの間の共鳴と共感（エンパシー）が必要としていることが分る。異文化が棲み分ける形の「共生」に止まらず、進んで「共創」の協力をして、はじめて、新文化を創生するエネルギーと化し、真に問題解決になる。

総じていえば、「アイデンティティの政治」を「積極的に社会から貼られた否定的な価値判断のスティグマを受け止めた上、価値判断をひっくり返す」行為と定義してみたい。そうすれば、「文化本質主義」は、マイノリティ・マジョリティグループを対立させやすい弊害がありながら、「文化相対主義」がまだ徹底的に実践できない現実においては、「多文化共生」を提言する際に、「戦略的な本質主義」を使用してもいい。当事者たちの尊厳を保ち、マイノリティには本質的な差異を持つことを強調し、その権益の改善を獲得するのである。他方、アイデンティティの流動性を保ち、本質主義の硬直化に陥るのを避けることを心掛ければ、バランスが取れる。こうして、アイデンティティの強調と否認に拘らず、同時に戦略的に主流と相互に「混雑」化することは、それぞれの個々人に自らの主体性を意識させることができよう。

**2.権力と歴史の「大きな物語(grand narrative)」に抗して**

　 上述してきたのは、「空間」をめぐる越境問題についてだが、次は「時間」軸について、この作品が如何に表現したかを論じたい。筆者が注目したいのは、作中で、日本統治時代の祖父母世代の物語に触れた際、必ず日本による植民統治の事実を描いたことである。しかしながら、それは、歴史の大きな物語とは**異なる**個人による、「小さな物語(mini narrative)」である。

「鳳梨酥（パイナップルケーキ）」の主人公靖之は、日本人同士の妻と母親の嫁姑問題を緩和するため、妻の代りに母親の機嫌をとるために、パイナップルケーキを、代りにお土産として購入した。そのあまずっぱい味を口にした時、突然、若い頃、近所に住んでいた引揚者の「湾生」松本が思い浮かんだ。松本は、台湾の南國風物を懐かしく思い、庭には 「シュロチタ、ゴムノキ、ヤシなど南国を髣髴させるものばかり」[[30]](#footnote-30)だった。松本が持つ台湾人のステレオタイプは、靖之の思い出の一つとなる。しかし、湾生松本が「大きな物語」を語るとき、その記憶は偏見を免れない個人の視点による「小さな物語」である。

―台湾は、いま、シナにのっとられている。気の毒な話だよ。リン、おまえさんの両親も苦しいだろう。本物の台湾人なら中国語なんか喋りたくないはずだ。[[31]](#footnote-31)

この作品において、現代と過去を合わせ鏡にし作品の奥行きを構築し、また、二種類の過去をめぐる解釈を提示している。そのほか、「鳳梨酥」に描かれた湾生の境遇も、植民統治の暴力を暗に批判している。植民地台湾では、上の階級に属す湾生であって、日本內地に撤退後、「引揚者」となって、台湾の故郷を懐かしむ行為は、日本人の目には、例えば単に台湾を観光地とみなす靖之の目には、異様な風景のように映っている。「松本の台湾時代の友人という老人たちが「ふるさと」を合唱するのを、大学生だった靖之は神妙な心地で聞いた。」」[[32]](#footnote-32)。

本当の状況は、常に歴史教科書ほど黒白がはっきりしていない。濱崎桂子がいうように「植民地主義、帝国主義の歴史においてこれまで表象されてこなかった「物語」の「完全な復元をめざし責任をとる」ことをポストコロニアル批評の義務と考えているが、これを「移民文学」に援用するならば、「表象されない(されにくい)現在の他者の物語を埋もれさせない」ことが、移民文学批評の義務だといえるかもしれない」[[33]](#footnote-33)。

他方、「百点満点」という短編では、日本統治時代を生きた台湾人寛臣が高女卒業生の妻を連れ、一緒に憧れる日本「內地」を旅し、「汽車」に乗り込む場面を描く。小説ではたえず日本天皇から三代の家族史を、寛臣一家の三代の悲喜と対比する。歴史の大きな物語と個人の小さな物語を平準化し、階級間の貴賤上下の差別を解消する。

寛臣たちが日本に滞在したこの数日間、現代のシンデレラたるかのじょが

微笑するようすをテレビで見ない日はなかった。前の天皇の崩御を見送った

ばかりの日本国民にとって、新しい天皇の息子の婚約という慶事はもろ手を

挙げて祝福するべきことなのだろう。[[34]](#footnote-34)

「天皇」を日本統治時代の象徵にし、自らの歳月を記録し、この個人の記憶はつまり小さな物語となるが、国家主義に勝る存在である。寛臣は、戦後台湾人であることを誇りに思うが、幼少期は、日本人先生の励ましも彼の自信を形作った。例えば、「寛臣は中国語ばかり喋るようになった自分の子どもたちにむかって、リン•シ•タイワンラン、アイ•ゴン•タイワンウェ、と怒鳴ったことがあった。」[[35]](#footnote-35)ところが、日本統治期、日本式の教育で優秀な成果を収め、「あの頃、だれもが、寛臣を良い子だと褒めてくれた」[[36]](#footnote-36)という叙述から、彼の矛盾したアイデンティティの心理を表している。

「百点満点」は、小さな物語で大きな物語を意識し、その共通の特徴とは、ルーツ探しと歴史の探求をすることにある。国境の内部には、国家の権力が、言語と文化をひっくり返す地位を有している。そこで、アイデンティティと国家への承認に影響を及ぼす。

これは温又柔がエッセイ集『台湾生まれ日本語育ち』の中で、日本統治期の作家呂赫若や、在日韓裔作家李良枝を探求し、「国語」と「母語」の拮抗を分析し、祖母語、母語、娘語のそれぞれの趣きの中で、錯綜する歴史を解し、歴史のコンテクストへの目配りである。

『空港時光』が人物の間の差異を硬直に定義していないからこそ、『空港時光』の中には「そうであったかもしれない自分と、そうではなかったかもしれない自分。架空の私がことあるごとに彼方で点滅しているのを感じる。」[[37]](#footnote-37)という意図が見えてくる。また、虚構の小説の人物は、恰も「虚構の私」、つまり移民者に止まらず、読者の中では多くの置き換え可能の人生に成り得たのであろう。

**3.文学伝統の大きいな物語に抗して：自己表象と他者表象が連動するメカニズム**

Gilles DeleuzeとFelixGuattariの名作『カフカ　マイナー文学のために』（法政大学出版、2017）は、かつてチェコのユダヤ人のカフカがドイツ語で創作することを例証に、「マイナー文学」の三つの特徵を帰結した。それは「言語の脱領土化、個人的な事項がじかに政治的事項につながるということ、言表行為の集団的アレンジメント」[[38]](#footnote-38)となる。

上述したように、第二節で議論した『空港時光』の言語使用は国の領土を超えた。そして、第三節で論じたように、家庭内の個人的な小さな物語だが、その裏にはなぜそうなったかに関する歴史と政治的な影響が仄めかされている。そこで、筆者が追求したいのは、では、この作品はいかに「言表行為の集団的アレンジメント」をしたのだろうか?

例えば、「到着」という短編では、「中華民國籍の男子には兵役の義務がある。咲蓉と笑美のどちらかが男の子だったのなら、父は日本国籍の取得を決意したかもしれない。日本で育った我が子が台湾で兵隊に行かずに済むように。娘しかいないから、父と母は帰化しそびれた」[[39]](#footnote-39)という表現は、家族愛が民族愛に勝る心の内を打ち明けている。

これは、家庭內の個人的決定でありながら、台湾の政治と直接係わるので、Gilles Deleuzeらが解釈した「言表行為の集団的アレンジメント」といった特性のように、「たとえ作家が周縁にあり、脆弱な共同体から孤立していようも、この状況のせいで彼はなおさら別の潜在的共同体を表現」[[40]](#footnote-40)することとなる。これを以って「到着」からの引用文を分析すれば、明らかに台湾人女性が日本で出会える場面の政治的な立場だけでなく、台湾人男性の境遇をも作者は意識していることが分る。

日比嘉高は、「越境する作家たち――寛容の想像力のパイオニア」[[41]](#footnote-41)で在日の外国籍を持つ作家温又柔、リービ英雄、そして、海外在住の日本人作家水村美苗、多和田葉子などの越境作家を比較し、言語の「開放性」[[42]](#footnote-42)を強調し、「過去の重荷や抑圧の記憶から言語的冒険を切断しようとする方向」[[43]](#footnote-43)は、彼らの共通点だと指摘している。これは、Gilles Deleuzeらの考察と相通じる。

さらに、日比嘉高は、温又柔の置かれた環境や日本文壇に着目し、以下のように批判している。

「日本文学をめぐる等号的前提」は現状認識としても歴史的認識としても幻想に過ぎないが、それでも大多数の人々は「日本文学」とはそのようなものだと漠然と思っている。そしてこの種の日本文学、日本文化の純粋性にまつわる思い込みやフィクションは、排外主義的な言説が構築する日本像とも親和的である[[44]](#footnote-44)。

総じていえば、移民文学によく見る家族史の描写、そして移民文学の真実の反映、旅行文学での異文化接触による新鮮感などによって他者に向けた目線は、被観察者(他者)の主体性と、重なることがあることを提示し、互いは峻別するものではないことを示した。これこそが、Gilles Deleuzeが言った「言表行為の集団的アレンジメント」である。

温又柔の自己表象の形成過程において、「特別」という言葉は、重要なしるしである。例えば、彼女は2018年『聯合文學』の399号のコラムには、「幼い私の中に芽ばえた自尊心は、ようやく自分と他の子どもたちと違う確実な証拠を見つけた。私は、台湾人。だから特別だ」という過去を吐露している。重層のアイデンティティを持つ温又柔は、この創作の姿勢の下で、『空港時光』の「他者表象」では、多少なりとも彼女の「自我表象」の色が反映している。従って、たとえ「他者表象」であっても、「代弁者」に足り得るある程度の真実性の保障を有している。そして、この「自我表象」と「他者表象」が連動しているメカニズムは彼女が創作する上での「特權」の一つになる。

例えば、「なぜ、台湾人は、日本人にこんなにもやさしいのだろう？いまも、むかしも。台湾は、日本にやさしすぎる。」[[45]](#footnote-45)と類似している話しは、吉田修一もかつて台湾高速鉄道の物語『』を書く時、日本人作家の立場で触れたことがある。但し、吉田の「純正」なる日本人の立場により、彼が描く「湾生」葉山勝一郎老人は、戦前台湾の友人呂燿宗を貶し、そしてその愛する女性を奪い取った。戦後、葉山が台湾を訪ね、呂燿宗に謝って、こう言った。「俺たちの友情を裏切つた。自分たちの友情を踏みにじつた。どんなに詫びても許してもらえるようなことじゃない。でも、この六十年の間ずっと後悔しながら生きてきた（頁424）」。そして呂燿宗は葉山を慰め、「俺たち台湾人ってのは、つらかったことょり、楽しかったことを覚えているもんなんだ。 (頁425)」と言った。男涙を流した葉山を見ながら、続いて、「……でもな、勝一郎、それを教えてくれたのは、あんたら日本人なんだぞ(頁425)」と返事した。そして、こうした描写は、当時、日本人評論家の新井一二三から「宗主国の姿勢の嫌い」[[46]](#footnote-46)があると批判された。筆者が思うには、吉田の描写は多少、一部の台湾人の寛大さを描き上げており、それは一部の事実を反映しているが、はやり吉田が日本人であるがゆえに、「他者による表象」としか認めてもらえなかった。

そこで、ここで言えるのは、「言語」はパスポートのようなもので、テクストにある異種言語共存(Heteroglossia)の言語使用は、恰も多重国籍者が複数のそれを持つように、虚構の世界で、自由に異なる人物に感情移入しやすい。しかしながら、「パスポート」も「言語」とまた同じく、ある種の法律の規則、或いは暗黙の了解で境界線を作りえるものだが、気持ちの流動を制限できない。

エッセイ「音の彼方へ」の中で温又柔はこう言った。一旦、パスポートという「生命線を絶たれたその旅行者は、通行権を与える権限を国家が独占する世界のなかを、あてもなくさまようしかない」[[47]](#footnote-47)。ところが、中華民国のパスポートを持つ咲蓉が「日本は、わたしにとって、外国じゃありません」[[48]](#footnote-48)と思うように、気持ちは国籍を凌駕する存在で、パスポートによって定義されるものではない。「自分と翠蓉は、逆だったかもしれない。台湾で育ったわたしと、日本で大きくなったあの子」[[49]](#footnote-49)の二人が共鳴し合う可能性、そして人生は置き換える可能だと想像する自由は、「言語」と「パスポート」に制限されることができるまい。

**終わりに　「他者性」から「相互主体性（intersubjectivity）」**

温又柔『空港時光』の分析を通して、作家が戦略的に以移動及旅行主題聚焦移民、多重身份認同者等弱勢族群　を解析し，證明此類越境文學對於台日文學皆具重要性　を証明し，並足以提供觀測台日的移民文學及世界越境、弱勢文學之參照　に足り得、また極めて同時代性の意味を持っている。纏めて三点がある。

一点目は、作家は「マイノリティ」である登場人物に焦点を置くため、移民、多言語使用者、多重アイデンティティ所有者について、その叙述には、「承認の政治」と「差異の政治」を求める傾向がある。こうした追求は秩序ある「共生」を求める過程において、「語言の政治」と「差異の政治」が戦略的に使用されいている。

二点目は、作中人物は完全に作家自身の経験を描くわけではないが、その視角はマイノリティに基づくため、大きな物語と小さな物語の対比を提示するのに成功している。

三点目は、温又柔は言語の多重性に着目し、恰も複数のパスポートを持つよに、それを「特権」にひっくり返し、自己表象と他者表象を交流させるメカニズムに生かしたことを論証した。

『空港時光』は、マイノリティを中心に述べられた物語で、大きな物語の趣旨と区別することに成功した。またに、作中人物の立ち位置は、日台においても周縁に属すため、容易に越境できる存在だとも伝わった。温又柔はエッセイ集に述べた自身の家族史の「自己表象」を投影し、「他者表象」を描き、他者の心の内に耳を傾ければ、フッサール（Edmund Husserl）が言う「間主観性（intersubjectivity）」[[50]](#footnote-50)は生まれ始め、即ち「世界経験は、私のまったく私的な経験なのではなく、共同体経験である」[[51]](#footnote-51)とのこと。

　作者が使った言語・民族・階級問題に遭遇する場面を分析することによって、作者は、如何に絶えずに中心やマジョリティの価値観を取り持つのを深く掘り下げ、解釈していることが明らかになった。また、彼女が対立に見える両陣営の隙間から、絶えずに新たな文学の実践を開発できたことは、同時代の作家として大きな意味を持っている。

**表一(括號の数字はページ数)**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 音訳 | （1）中国語の漢字に中国語の音声を日本語で表記 |  |
| (73、76、77、78)、(73、76、77)、(73、74、78)、(84) | |
| （2）中国語の漢字に日本語の音読みを表記(漢字訓読) | |
| (101)、(108) 、(170) | |
| （3）中国語の漢字にピンインで漢字の音声を表記 | |
| (8)、(16、24)、(17)、(17)、(20)、(25)、(26)、(26)、 (27) 、(27)、(28)、(36)、(38)、(39)、(47)、(49)、(66)、(71)、(75、78)、(110)、(117)、(118)、(119)、(119)、(121)、(152)、(153)、(155、156)、(158)、(160)、(161)、(170)、(171) | |
| （4）日本語で台湾語(閩南語)の音声を表記 | |
| (目次、81、87、89、90、92)、(48)、(59)、(59、116)、(59)、(74)、(95)、(114) | |
| （5）日本語の片假名のみで台湾語(閩南語)の音声を表記 | |
| リン•シ•タイワンラン、アイ•ゴン•タイワンウェ（105） | |
| 意訳 | （6）中国語の漢字で日本語の解釈を表記 | |
| (17、19、20、21、22)、(19、21、22、23、32)、(18)、(20、21、24、51、56)、(20)、(20、22、50)、(20)、(20,22、125)、(21)、(25)、(27、34)、(27、34) 、(27、34)、(27、34)、(28)、(29)、(38)、パンイェーネ(真夜中注だよ)！(47) 、(50、51、55。59)、(51)、(51)、(54)、(55)、(56、115、125)、(59)、(73、80)、(76、77)、(79)、(101)、(108)、夫妻(109)、(110)、(110)、(110、119)、(110)、(119)、(112)、(112、118、129)、(1123)、(114)、? (114)、(114)、(114)、(122)、(125)、？(144)、。(144)、(114)、(149)、? (155)、？(155)、(158)! (161)、?  (162)、!(162)、！(172) | |
| （7）台湾語の漢字表現に日本語で解釈をつける | |
| (48、49)、(109)、(109)、(110) 、 (124、125)、(126) | |
| （8）台湾語(閩南語)の音声に日本語で解釈をつける | |
| ！(31)、(48)、(48)、(48)、、！(49)、(49)、(54)、(58)、(99)、(100)、(102)、(104)、(105)、(115)、 (128)、(128)、？(144)、！(160) | |
| （9）中国語の漢字に中国語の音声と注釈(または註解のみ)をつける | |
| 台湾式の料理(清粥=お粥、油條=塩味をつけた小麦粉で作った揚げパン、鹹菜=台湾風漬物、などなど)(159) | |
| 二重翻訳 | （10）西洋の概念の中国語に日本語の翻訳を併記 | |
| (32)、白色(54)、(57、59)、(57、59)、(66)、(66) | |
| （11）日本語にある外來語に、英語で解釈する | |
| (37)、(39) | |

1. 東京：彩流社、2017、228頁。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 頁23。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 頁24。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 頁69。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 霍米・巴巴（Homi K. Bhabha）「佐藤慎司、ドーア根理子編『文化、ことば、教育―日本語/日本の教育の「標準」を超えて』、明石書店、2008ぐう梅蜜及ぶ御所区民是協力問題」、劉紀蕙編『文化的視覺系統Ⅰ：帝國─亞洲─主體性』（台北：麥田，2006）、頁138-139に収録。日本語訳は筆者による。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 頁28-29。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 頁114。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 頁188。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 頁146。 [↑](#footnote-ref-9)
10. 頁147。 [↑](#footnote-ref-10)
11. 『臺灣文學學報』29號、2016。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 人文書院、2014、149-150頁、269頁。 [↑](#footnote-ref-12)
13. 人文書院、2014、149-150頁、269頁。 [↑](#footnote-ref-13)
14. 頁116。 [↑](#footnote-ref-14)
15. 頁116。 [↑](#footnote-ref-15)
16. 頁59。 [↑](#footnote-ref-16)
17. 頁69。 [↑](#footnote-ref-17)
18. 頁105。 [↑](#footnote-ref-18)
19. 蘇珊.桑塔格著、黃燦然訳、一方出版、2002、頁182。日本語訳は筆者による。 [↑](#footnote-ref-19)
20. 蘇珊.桑塔格著、黃燦然訳、一方出版、2002。頁185-186。日本語訳は筆者による。 [↑](#footnote-ref-20)
21. 荷米．巴巴（Homi K. Bhabha）著、蘇子中譯、「探討梅密及後殖民之協力問題」，收於劉紀蕙編，『文化的視覺系統Ⅰ：帝國─亞洲─主體性』（台北：麥田，2006），頁132-133。 [↑](#footnote-ref-21)
22. 頁49 。 [↑](#footnote-ref-22)
23. 『エクソフォニー――母語の外へ出る旅 (岩波現代文庫) 』、2012.10。 [↑](#footnote-ref-23)
24. 頁71。 [↑](#footnote-ref-24)
25. 『戦後文学を問う―その体験と理念 (岩波新書)』、岩波書店、1995.1。 [↑](#footnote-ref-25)
26. 川村湊、野崎歓、村田沙耶香「創作合評(第412回)「予言残像」牧田真有子 「乙女の密告」赤染晶子 「来福の家」温又柔」，『群像』 65-7、 2010.7。 [↑](#footnote-ref-26)
27. 東京:弘文堂，2012。 [↑](#footnote-ref-27)
28. 朴鐘碩・上野千鶴子其他著『日本における多文化共生とは何か―在日の経験から』（東京：新曜社、2008）頁215-216。原文「多文化主義にはふたつのバージョンがあります。ひとつは“差異を承認せよ”という「承認の政治」です。そうなると、お前の差異と真正性（本ものらしさ）を証明せよという要請に迫られます。これが本質主義や特殊主義につながります。もう一方で“差異はないから同じように扱え”という平等の要求です。そうなると個人化や普遍主義が進む一方で、特殊な差異は認めない、ということになります」。 [↑](#footnote-ref-28)
29. 東京:慶應義塾大学出版会，2016。 [↑](#footnote-ref-29)
30. 頁87。 [↑](#footnote-ref-30)
31. 頁91。 [↑](#footnote-ref-31)
32. 頁91。 [↑](#footnote-ref-32)
33. 頁259。 [↑](#footnote-ref-33)
34. 頁106。 [↑](#footnote-ref-34)
35. 頁105。 [↑](#footnote-ref-35)
36. 頁107。 [↑](#footnote-ref-36)
37. 頁141。 [↑](#footnote-ref-37)
38. 頁32。 [↑](#footnote-ref-38)
39. 頁121。 [↑](#footnote-ref-39)
40. 頁30。 [↑](#footnote-ref-40)
41. 『文学界』6月号、2015。 [↑](#footnote-ref-41)
42. 頁224。 [↑](#footnote-ref-42)
43. 頁225。 [↑](#footnote-ref-43)
44. 頁222。 [↑](#footnote-ref-44)
45. 頁128。 [↑](#footnote-ref-45)
46. 原文は「宗主國心態之嫌」。新井一二三「新井一二三：新時代日台文學」 『名人堂電子報』2012.12.13。 <https://paper.udn.com/udnpaper/PID0030/228582/web/（2020．4.24>確認） [↑](#footnote-ref-46)
47. 頁134。 [↑](#footnote-ref-47)
48. 頁129。 [↑](#footnote-ref-48)
49. 頁130。 [↑](#footnote-ref-49)
50. フッサールなどの現象学者が提唱した概念。相互主観性や、共同主観性ともいわれる。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』によれば、「純粋意識の内在的領域に還元する自我論的な現象学的還元に対して，他の主観，他人の自我の成立を明らかにするものが間主観的還元であるが，それは自我の所属圏における他者の身体の現出を介して自我が転移・移入されることによって行われる」となる。<https://kotobank.jp/word/%E9%96%93%E4%B8%BB%E8%A6%B3%E6%80%A7-48882（2020．4．25>アクセス） [↑](#footnote-ref-50)
51. 浜渦辰二「他者と異文化―フッサール間主観性の現象学の一側面―」『哲学年報』、九州大学文学部紀要，第49輯1990.３より。 [↑](#footnote-ref-51)